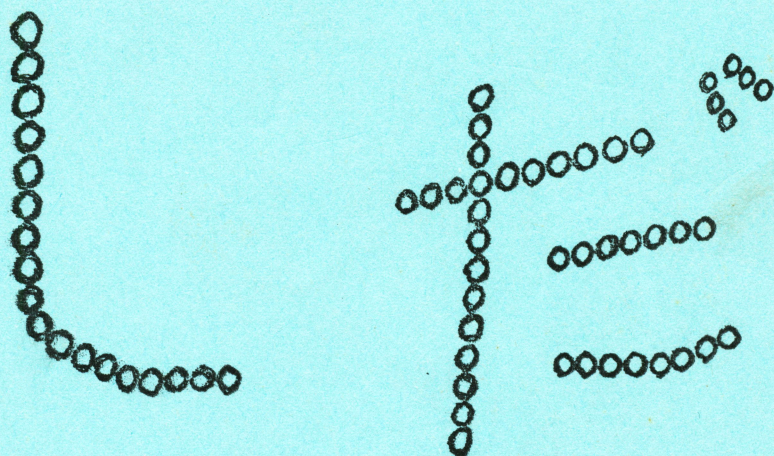




20

新ハイキングクラブ
横浜支部

巻頭言

影山元芳

昨年来新しい人が多くなり支部にも若さがあふれてきた。その中で支部発起人でもありまた私達の良きアドバサーであつた、浜野条治、加藤喜代子両氏が病に倒れ、支部を去つた。まことに淋しいことであるが幸に両氏とも回復に向つて居るとのこと、支部に再び元気な姿を見せてくれることを待ちたい。

また最盛期には70名に近い会員数であつたがほとんどの方が支部を去り当時のメンバーは二人になつてしまつた。そこで何か記念行事の年にでも一度のB・O・Gに呼掛け、音話をしてみたいと思うがどうだろうか。

今年の委員は大きく若返り結構だと思ふ。大いに支部発展のため頑張つてほしい。私が代表であつた或る年、本部よりあゝ云う古い人が先に立つてゐるから横浜は駄

目なんだと蔭口をたゝかれた事があつた。それは支部会費が高く本部会費（本代）を払わない人、会費切れの人が多いと云うことと、支部山行は委員が勝手に決めて会員に押しつけているから等と事実と反することとで批判してゐた。何とばかりかばかしい事だと腹が立つた。

若返つた今年いや今後はこのような事を云われないうへ云われるのは私一人で沢山である。支部を発展させていただきたい。それには三水会へ本部集会への出席、本部山行の受持等々本部の行事に多数参加して、支部のP.Rをし、他支部との交流を大いに望む次第である。

目次

巻頭言

影山元芳

山行報告

白馬岳

蒲谷弘子

南アルプス縦走

碓 清人

スケッチ山行火打山

渡辺関代

20 10 8 4 1

八幡平	足立久子	22
リイ・シリ	鈴木国之	25
小金沢連嶺	斎藤隆子	30
詩	吉岡信子	33
新ハイとの出会い	佐々木隆	34
無題	中山一重	37
山での失敗	浅井俊明	38
静かなニ子山	石山武	42
あこがれの山	佐々木美智子	43
平ヶ岳にて	今川真沙子	52
満ちたりた日々	久保田治	53
スキ	渡辺三世子	56
山	湯口静江	59
山行一〇〇回	竹田明	60
山の友	吉岡信子	67
趣味の行末	今川真沙子	68
会報受贈御礼		70
編集後記・表紙・カット	浅井俊明	

山行報告

才151回 6月23日 北ハツ岳・天狗岳

参加者

石井春男（係）、久保田治 神谷和雄 関野昌

碓清人 中山一重 渡辺関代 内田栄子 佐

々木美智子 福原ミツイ 北村玉江 他五名

ユースタイム 茅野（6・30）浅ノ湯（7・25）8・05）黒百合

平（9・35）9・45）東天狗（10・55）11・30）西天狗（11・40）11・50）4

東天狗（12・05）12・45）黒百合平（13・40）13・45）浅ノ湯（15・15

15・45）茅野（17・00）

才152回 7月7日 日光キスゲ平

参加者 竹田明（係）久保田治 鈴木国之 神谷和雄

吉岡信子 佐々木美智子 中山一重 斎藤隆子 内

田栄子 他2名

コースタイム 浅草(0.00) 東武日光(2.38) 4.45 霧降の滝
(6.00) 7.00 霧降高原(9.00) 9.15 才4リフト上(9.45) 10.15
赤雞山(11.50) 12.00 才4リフト上(13.05) 13.30 霧降高原(14.
20) 14.40 国鉄日光駅(15.20) 15.43 上野(18.16)

才153回 夏山山行 8月8日 11日 白峰三山(南アルプス)

参加者 竹田明(係) 神谷和雄 本多隆志 渡辺関代

内田栄子 佐々木美智子 北村玉江 他1名

コースタイム 一日目 広河原(4.30) 6.00 水場(9.00) 5

9.15 御池小屋(9.30) 10.30 小太郎の肩(13.40) 14.00 肩ノ小

屋(14.50) 二日目 肩ノ小屋(7.15) 北岳(7.55) 9.00 稜線小

屋(9.40) 9.50 間ノ岳(12.10) 13.00 農鳥小屋(14.15) 三日目

農鳥小屋(4.35) 西農鳥岳(5.25) 5.35 農鳥岳(6.35) 7.00 大門

沢下降矣(7.30) 7.40 水場(9.45) 10.15 大門沢小屋(10.50) 12.00

奈良田発電所(15.00)

才154回 8月18日 丹沢勘七ノ沢

参加者 石井春男(係) 小川竜利 久保田治 鈴木国之

石山武 浅井俊明 竹田明 吉岡信子 田中絹代

内田栄子 足立久子 他3名

コースタイム 渋沢(9.15) 大倉(9.30) 二俣(10.45) 11.30) F 5(13.00)
14.30) 花立(16.30) 17.00) 大倉(19.30) 19.35) 渋沢(19.50)

才155回 8月31日 9月1日 才2回丹沢寄沢合同キャン

参加者 石井春男(係) 中山一重(係) 鈴木国之 佐次幸 6

郎 野村晃一 吉岡信子 渡辺関代 斎藤隆子

才156回 10月27日 小櫃山(オデン山行)

参加者 久保田治(係) 鈴木国之 石山武 竹田明 佐

々木隆 中山一重 吉岡信子 今川勝子 足立久子

渡辺三世子 湯口静枝 他6名

コースタイム 焼山(6.40) 塩平(7.20) 弘法岩(8.50) 乙女高原

(9.05 ~ 10.00) 焼山峠 (12.20) 水場 (11.40 ~ 12.30) 小樺山 (12.40 ~ 13.25) 中
枝入口バス停 (16.00) 窪平バス停 (16.30) 山梨駅

才 157 回 11月10日 箱根・神山、駒ヶ岳へおしるこ山行)

参加者 鈴木国之(係) 関野昌(係) 石山武 中山一重
吉岡信子 斎藤隆子 蒲谷弘子

才 158 回 11月31日 ~ 12月1日 忘年山行三浦海岸

参加者 関野昌(係) 中山一重(係) 久保田治 石山武 7

石井春男 竹田明 佐々木隆 吉岡信子 渡辺関代
足立久子 北村玉江 佐々木美智子 湯口静枝 他
3名 ゲスト 大田支部添田三郎

油壺ヘドライブ

才 159 回 1月12日 伊豆天城山

参加者 鈴木国之(係) 中山一重(係) 久保田治 石井春

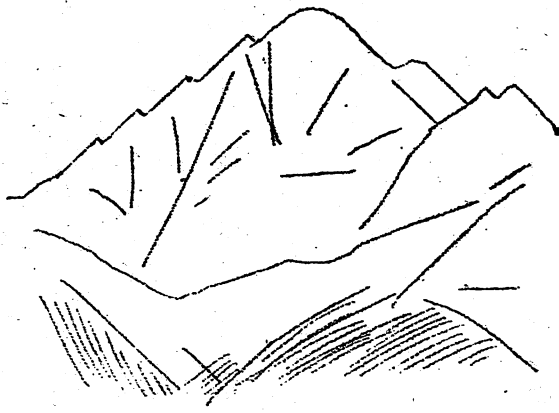
男 吉岡信子 渡辺関代 足立久子 田中絹代 斎藤隆子 他一名
雨天の為、途中で沈没

白馬岳

蒲谷弘子

前々からの念願がなつて昨年の八月にやつと白馬岳に登ることができた。

新宿を十一時に乗る為に八時から並んでやつとの思いで乗ることができ、午前六時信濃四ツ谷に着いた時は体がいたくて、ぐったりしてしまつた。元氣を出し、駅前で登山者名簿を書いて、バスに乗りこんだ。約一時間で終点猿倉に着く。猿倉荘で腹ごしらえをして出発、ブナの緑にさえぎられ、ひんやりと涼しい細道をだらぐと登り白馬尻小屋まで一時間半、ここよりアイゼンを付け、大雪渓を経てねぶか平、小雪渓へと上り約五時間で頂上



に着く。白馬山荘で一泊して、朝は御来光を見て山頂より、岩くずの、堆積のトレールをどんどん下ると、長野、富山、新潟の県境へ三国境へ出る。これより快適で、歌がとび出しそうなびやかな尾根をどんどんいくと大日岳に出る。ここからの白馬岳は実にすばらしかった。又所々の斜面には高山植物が目を樂しませくくれる。

これより二時間ほど下ると有名な高山湖、白馬大池に出る。この付近一帯、お花畑に囲まれ、大池にはサンショウウオがいてとてもステキな所である。ここで一休みして蓮華温泉を通り七本かつらへと下りそこからバスで平岩に出る。

南アルプス縦走

碓 清人

(一) 北岳と間ノ岳と塩見岳と荒川三山
八月二日へ薄曇り前夜からヤブカに刺れながら待つて
いたのにもかかわらず、山梨交通側の整理の不手際から
乗リこぼしにあい、やむなく同類三名とかたらいタクシ
ーで広河原へ入った。前年の白峰三山縦走では草スベリ
コースをとったので、今回は大樺沢コースを一路北岳山
頂へと向ったのだが、四〇K近い荷の為か、ペースの乱
れはげしく遅々として進まず、やつとのことゝで、丁度が
スの中からその全貌を現わした北岳バットレスを右上方
に仰ぎつつ雪溪を登りきり立った山頂は、前回のそれと
は全く異り、ゴミと人、人、人……約七十名位はい
ただろう。夕闇迫る北岳稜線小屋へ入る。小屋着十七
時。

八月三日（晴）今日は歩行時間もわずか四時間余の休憩日、七時頃まで寝てゐるつもりでいたが早々と目が覚めてしまい鳳凰方面から昇る御来光を拝し五時出発。今回は天候にも恵まれ前年には得られなかった三〇〇〇m稜線からの一大パノラマの全てを見せられた。間ノ岳では、塩見岳、荒川三山、赤石岳等のこれから行く南部の山々がその姿を見せていた。しかしここも人々人々……。そんな訳で永居は無用と三峰岳へ。流石に塩見岳方面へ向うパーティーは余りないらしく三峰岳山頂では、仙丈岳からうねうねと繞いてくる仙塩尾根、眼下に白く光る野呂川右俣沢、多くの登山者達が行き来している北岳の間ノ岳の稜線等々の周囲の展望を、僕一人だけで独占できた。それらを眺めながら一時間近くそこにいた後、シナノキンバイの咲き乱れる樹立帯を熊ノ平小屋へと下った。小屋着十時半。

八月四日（晴）四時出発。東面に大きく農鳥岳が立ち
はだかつている為か日ノ出が遅い。小屋から塩見岳まで
は、白、赤、黄、紫等の色とリどりの高山植物が咲き乱
れていて快適な散歩コースだった。塩見岳は、遠くから
見ると丸みを帯びて何やらやさしそうな感じを受けるが、
近づくとつれて岩だらけのゴツゴツとしたその荒々しい
本性を現わしてきた。塩見岳頂上では、三六〇度のすば
らしい展望が待っていた。塩見岳から三伏への道は、照
りつけてくる暑さの為か、それほど登降はなかつたに
もかかわらず長く苦しかった。小屋着十四時。三伏小屋
ではバーナーが故障してしまい、どうなることかと思っ
たが、明日は下山だというパーテーから固型燃料の大を
譲ってもらい助かる。

八月五日（薄曇）今日は今山行中で最長の一日コース。
三時半、ライト片手に出発、烏帽子山頂からは、日の出
直前の地平線が紅に輝き、塩見、間、農鳥等の山々が、

パープルカラーのシルエツトとなつてそれらの荒々しさを隠していた。ここから小河内岳を経て高山露营地までのコースは、南戸南部らしいしつとりとして、おちついた感じのコースだった。中でも、大日影山、板屋山付近の樹林帯ではサルガオのまとわりついた木々の間から朝の陽の光がさし込み、下の緑の系には色とりどりの花々が咲き乱れ、その上を乳白色の朝霧が静かに流れてゆくという様な非常に幻想的なふんいきを醸しだしていた。しかし高山露营地から荒川前岳へのガレ場の登りは非常に苦しく、数歩登つては休み、又数歩登つては休みをくりかえし、やつとの思いで荒川中岳との稜線に立つた。眼前には赤石岳が大きい。今度は登つてきたのと同じ位、砂礫の斜面を荒川小屋へと下つた。小屋着十三時四〇分。荒川小屋から赤石岳まではほんの一足で小屋番の話しでは空身であれば小屋から二時間半ないし三時間で往復できるといふが、先ほどの荒川岳の登降でばててしまい小

屋で寝ていた。夜、すさまじいほどの雷雨。

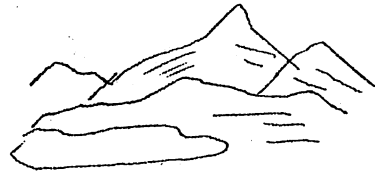
八月六日（晴）今日も三時、テイト片手に出発、昨日下午つた道を稜線までもどる。ふりかえれば、下方には赤石岳へ向うパーターの灯が点々と動めいくいるのが見える。稜線に出たとたん吹きとばされるのではないかと思うほどの伊那側からの強風、しかし左後方には中央アルプスが手の届くほどの近さ、右後方にはその名のおり朝日のせいか赤く輝く赤石岳、左前方には塩見岳がそのユニークな姿を大きく見せ、さらにその向うには白峰三山や、地藏岳のオベリスクもチョヨンとかすかに見える鳳凰山塊、右前方には雲海の上に霊峰富士が君臨等々のすばらしい大展望。悪沢岳へ荒川東岳へは岩だらけの静かな場所。風を避け岩陰で大休止。ここでは昨夜は千枚小屋泊りで、これから赤石、聖、光と縦走するという静岡なまりの単独行の男性としばし談笑。次会には僕も三伏起点で、鍛と同じコースを歩いてみたい。悪沢岳から

マンボー沢の頭までは、前後左右共すばらしい大展望だった。が、丁度フイルムが切れてしまい実に残念。マンボー沢の頭からは急な全く展望など得ることのできない樹林帯の中をガクン、ガクンと二軒小屋へと下った。小屋着十二時。

八月七日(晴) 今日はいよいよ下山、しかし小屋との標高差六〇〇余メートルの転付峠を越えねばならない。五時出発、しかしさほどのこともなく転付峠へ着く。ふりかえれば千枚岳、塩見岳、赤石岳がなつかしく又前方には雲海の上に富士がすばらしい。峠からは沢沿いのコース、田代発電所からは新しくできた左手の林道へ入ったが、これは失敗。約一時間位歩いたところを車にひろわれ発電所へ逆もどり、発電所からは立教大ワンゲルパークの急病人を運ぶという東電のジープに便乗して新倉へ。新倉からはバスで身延へ出、東海道経由で帰宅し

た。

昭和四十三年八月二日〜七日 単独



(二) 甲斐駒く仙丈岳

八月二十二日(曇後晴)竹宇駒神社発、五時
四〇分、急登の多い南アルプスでも、名だたる
黒磯尾根の急登も、前回の四〇K近い荷と合泊
6日に及ぶ山行のたまものかさほど苦にもならず、ワン
ピッチ四〇〜五〇分で登れた。五合目の小屋上部付近で、
たぶんイタチかオコジョだと思ふ体長二十五センチ三
〇センチの小動物と遊ぶ。僕が休んでいると一メートル
位近くまでよつてきては又チヨロ、チヨロと木の穴へ逃
げてゆき、そして今度は別の穴からその顔を出し、時た
まキユツキユツと鳴いたりする。この様な動作を約三〇

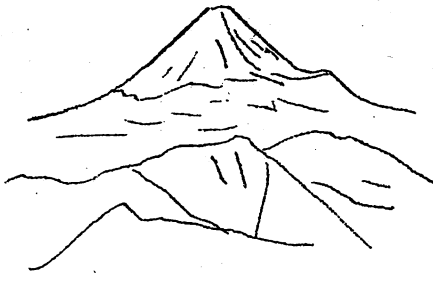
分位くりかえしていたが、写真を数枚とつたが、いなくなつた。五合目からはハシゴやクサリを伝つて一層の急な登りとなつたが、道の脇には駒岳講の信者達が建てた石塔、石仏、宝剣等がおかれていた。七合目の小屋には予定よりも大分早く十二時十五分到着、小屋では先に着いていた単独行の男性から「今月の初めに、烏帽子の頂上でお合いましたね」と言われる。あの時三沢峠から高山露营地まで抜きつ抜かれつした男性三人パーティーの一人とか。彼等は荒川小屋泊り後、赤石、聖と越えて聖平泊り、そして翌日大河内沢を下山したとのこと。

八月二十三日へ晴時々曇。四時四十分出発。時計が三〇分も遅れているのも知らず大失敗。七合目の小屋からは山岳宗教の盛んな山特有の非常に狭まつた岩の間や、ハシゴやクサリを伝つての急登が続いた。八合目で御来光を迎える。駒岳講におけるその信仰対象、摩利支天の

白壁が昇つたばかりの朝日を受けて淡紅色に輝いていた。花崗岩の白い砂礫の敷きつめられた駒山頂では、眼前に豊かなその野の広がりを見せる仙丈岳はむろん、鳳凰山塊、北岳、間ノ岳、塩見岳、荒川三山、赤石岳等の南アルプスをはじめ、中央アルプス、木曽御岳、北アルプス、ハケ岳等々の三六〇度全く遮るもののない大展望。中でも北岳は丁度マサカリの刃の様な重々しいずるどさを見せその中腹には肩ノ小屋とおぼしいトタン屋根がキラキラと輝いていた。駒山頂からは歩きにくい砂礫のトラバース、駒津峰、双子山、北沢峠を経て馬の瀬ヒュツテへ、ヒュツテ着十二時二〇分。ヒュツテのまわりには、トリカブト、エゾニユウ、ウサギヤク、シナノキンバイ等々の花々が咲き乱れ一寸したお花畑。ヒュツテで一休みした後、カメラ片手の空身で仙丈岳往復、カールのカレ場を登つて立つた仙丈岳頂上は、そのすそ野の豊かな広がりからは余りにも扶さぎた。山腹はあいにくのガスのため

展望は皆無。山頂直下のカールの岩陰には淡青色の色が
キョウが、ひっそりと咲いていた。

八月二十四日へ曇時々晴し今日は下山、四時半出発。
馬の瀬の稜線ではガスが低くたれこめ、小雨まじりの強
風が伊那側から吹きつけくる。しかし樹立帯の中へ入
るとそれもなくなり、しつとりとした丹沢新道を、足裏
にフワツとくるコケむした土の感触を楽しみながら下る。
赤河原からは、荒涼とした戸台川河原を、岩角の赤ペン
キに導びかれながら一路戸台へ。戸台着十時三〇分。
（昭和四十三年八月二十二日～二十四日 単独）



スケッチ山行・火打山

渡辺関代



火打山

田口駅にはスキー・シーズンに何回か訪れた事がある。その見なれた駅からバスで笹ヶ峰牧場に行く。途中眺める妙高山の赤くガレた個所が印象的です。一時間程を終

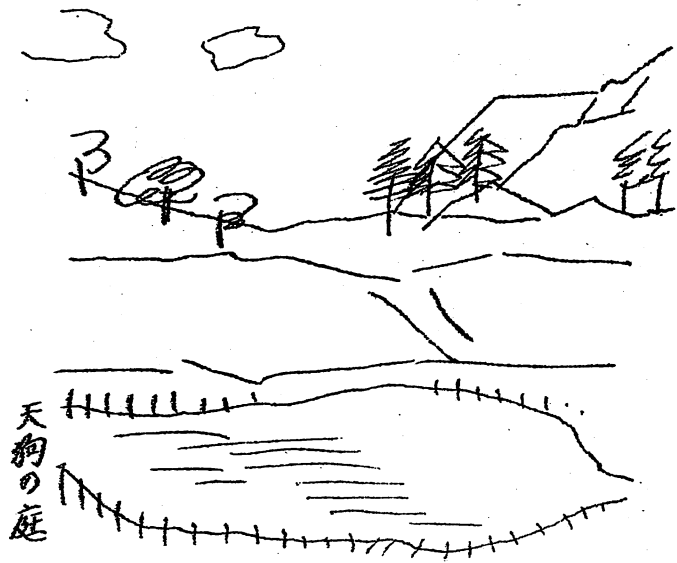
点の牧場に着きました。牧場は広々として今のバスで降りた人々が散りくにならると静寂になつた。牧場からすぐに樹林の路に入る。先行した女学生達を追い抜き、むせかえるような草いきれの中に一人きりになつた。

路が十二曲に分かる頃、背後に戸隠や北アルプスが

徐々にせり出してくる。急登が終ると左手に焼山・火打山がまだ残雪を残してピラミツドの様にそびえている。ここまですると今夜の泊りの高谷池ヒユツテの屋根が少し見えただけヒユツテまで一投足と流れのそばで休憩する。

ヒユツテは大きな池塘のそばにあり、入ると小屋のおじさんが愛想よくむかえてくれた。昼食をすませて、火打山に向う。大きな池塘のわきを抜け、天狗の庭におりる。そこには残雪あり、池塘あり、色々の高山植物が咲きみだれている。いつかスライドで見せてもらつたところ／＼思い出そうとする。イワカガミ・キヌガサソウ、……努力のかいなく思い出せない。残念。

天狗の庭から残雪を通り、ハイマツを踏んで行くと雷鳥が私の前を走つていった。雛を三羽もかゝえて、私を雛から離そうとして、私を先導してくれた。頂上直下は、カラ身なのに意外にきつい登りだ。頂上に着いた時はガ



スがかかり始めていたが、天狗の庭と高谷池にユツテが絵の様に見える。焼山がすぐ目の前にある。明日は妙高へ行くが、この次の機会には是非焼山の方にも行つてみたい。

八幡平

足立久子

は何年来のことであろうか。他に何一つ物音のしない静かな朝、七月とは思えぬ冷え込みよう。昨日の十和田に引続き今日も又一日お天気でありますようにと跳起きる。いやーこれはいけない。雨ではないか。

ホテルと言うよりは山小屋の感、蒸ノ湯ホテル、五時少し前小鳥の声に目覚める——このようなこと

朝食をとつてゐる間にも雨脚は強くなるばかり、どうしたのかと思案に暮れる。小屋のおじさん、山頂の方を見遣りながら「この空じゃ今日はダメだね。あっさりと云う。色々説明もしてくれるのだが、なにせ東北弁、言葉が殆ど通じない。親切だけを有り難く頂戴しておくとにする。それでもやはり諦めきれず、部屋でユースの練り直し等落着かない。十時頃どうやら少し小止みになつてきたので小屋の人達にはダメ押しされたのだが完全武装で出掛けることにした。

小屋のすぐ前から登りになつていて湯気の立ち昇る岩の間を登つてゆくこと十分余り、ここにもトラフターが入り込んで工事中、仕方なくどろんこの回り道を歩くことになる。ぐつぐつと煮えたぎつてゐる噴湯を眼下に見、無気味なものを感ずる。その頃には雨は止み、薄日さえ差してきた。やはり普段の心掛けの現われか。こうなると足は軽やかに頂上へと勇む。

熊笹とアオモリトドマツの間を縫つてのゆるい登りに

は高山植物があちこちに、さつき迄の雨の雲をつけて可
憐に咲いている。本を取り出し見比べては名前を知ろう
と懸命になつた。衆な登りで八幡平頂上へは訳なく着い
てしまった。点在する池には水芭蕉の葉が生茂り、雲の
切れた青空を映して何とも云えないものが多く名は分か
らない。発ち去り難い思いで一時間程休息の後八幡沼へ
向う。北面の残雪が何か氷山を思わせるようだ。沼では
釣ができるとか、ここぞ私達は初めて二組のパーテイに
出会つた。

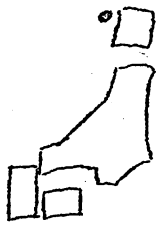
アオモリトドマツの間を抜けて源太森展望台からの眺
めはすばらしい。八甲田は望めなかつたが雄大に聳える
岩手山が霞み、その左手なだらかな斜面が広大に伸びて
いるのは黒谷地か。快晴であればさぞかしと思われ少々
残念、真夏のことで仕方がないが。所々に雪渓を見な
がらリフト山頂へと向う。途中一昨日開通したばかりの
バスに出会い茶臼口付近より乗つてしまうことにした。

乗客は我々のみ。松尾鉾山を経、今夜の泊り松川温泉迄はバスの連続であつた。

初めて見る鉾山の町、黒く沈み、人家はあるが中に生活する人々の動きは全く感じられない。公営市場をのぞいてみたが、大よそ活気等という言葉は微もない。そこに於て我々は全くよそ者の感。ここの人達は今私達が下りてきたばかりの八幡平それがバスで一時間と離れていないことを知つてゐるのだろうか。そして毎日の前に聳える岩手山が目に入つてゐるのだろうか。後にこの鉾山は閉鎖されたと聞く。我々が訪れた時には既にもうその一歩手前だつたのだろう。

ツイ・シリ

鈴木国之



稚内港を出港した船はノサップ岬を迂回し、日本海に出る。所並のすぐ上には暗い雲がおおい被さつていた。清掃された船内に入ると、

若い人達がいつぱいなので、縫うように奥へ進むと、座る位の場所があった。昨日はほとんど寝ていなかっただのに、以外に眠くない。もう三十分で着くという時間、ふたたび甲板に出た。リシリ岳は中腹以上雲が被つていて見えない。

リシリに登るんですか。そばの人に言われてから、思い出した様に「そう……今日はどうしようかなあ。」と、幌延を過る列車の中からは、よく見えたんですよ！」その言葉には晴れる可能性と期待とが感じられた。家々の輪郭がはつきり見えるとオシドマリ港で、棧橋のすぐ上には白い灯台が、緑の小高い丘にありきれいだ。異国の島にでも上陸する様な気分も、島に上ると旅館の人々が屋号の入った旗を持つて待構えているし、観光バスも何台か並んでいるので、途端にシーズン到来の、あわただしい島なんだと思返す。魚臭い坂道を少し行くと土産物屋や食堂がある。その中の小さな食堂に入り、早めの昼食をとった。

入山許可証を書き、夕方と明日の朝の食糧を買い入れて小さなザツクに詰める。港からの道を少し戻つて、ボーン山と言う変つた名前前の寄生火山であるピークを捲いて行くと、山道となり、背後には蒼い海がしだいに大きくなつた。雲は徐々にとぎれて、到々山頂まで見えた。海から上つた、なだらかな山稜は山の中程まで続くが、それから鋭い頂へと、いつきに伸上る。山麓の美しい森林や海岸近くの草原は、ただ、その美しい山頂部を引立てる為にはかなかつた。厳冬期や残雪のこの山は、裏剣、北穂からの槍、遠見尾根からの鹿島槍、早川尾根の北岳などの様に、日本で最もアルペンの的で美しい山になるのだろう。

横浜を出てから6日。天幕と駅で過ごして来た体には、7合目にある避難小屋までは長い道のりだつた。20分歩いて10分休み、レモンをかじり水を飲んでからまた登つ

た。小屋のある尾根の平坦な所に出るとやつと森林限界で、そこからは美しい円錐形のリシリが夕暮の中にあつた。

破れた窓枠、ドアの無い入口、床さえも室の半分は地面のままで、冷たい風がゴウゴウと唸る。昼真の焼け付く様な暑さが恋しい。そんな場所だから夜になると羽目板の間からは、オシドマリの漁火を想わせる町の灯も上つて来たし、山を取り囲む星の光も入つて来た。長い間柜てていたイメージがその時にはあつた。10年程前、先輩から聞いたこの島旅が、いつか夢となり、こうして山の懐に入つている今、実現した運のよさに感謝したい。しかし、どんなに遠くへ来ても、又極しい冬の頂に立たれた時でも、もうこれで最期かも知れないとは思わない事にしている。『今度はいつ来れるかなあ……。』へまだ若いのだから。

午前二時を過ぎた頃、下から登つて来た集団が目覚

めた。ユースに泊つて11時頃から登つてきたという人達の
の後について、昨日の続きが又始まつた。あれ程強く吹
いていた風もやんだ性もあつて、30分・5分のリズムも
すぐに乱れ、まったく暑くてきつい登りになつた。1ヶ/
9mの山頂に着いた頃には、20人位の人が、陽の上る寸
然の空の一角を見つめていた。雲海の上から陽は上つた。
足元を照らした日差はどんどん山麓へと下りていく。ニ
ドル状の岩峰が続く南稜は雲の下のおニワキへと続き、
西側のク스가夕には日本海が見え、影のリシリはその海
にまで伸びていた。

ク스가夕への道は全く静かだつたし、岩峰群の眺めも
よかつた。うろこ雲が頭上をくだいに埋め、海辺りのバ
ス停に着く頃には、黒い雲が、つい先程まで居た山頂を
覆つてしまつた。

レブンへ向う船からは、海上から目標になるようなり
意味を持つアイヌ語「リイ・シリ」も島に來た時と同じ姿
だつたし、レブンでも稚内へ帰る時も、ノサツポ岬の埠

頭からも、それ以上の姿は到々見せてはくれなかつた。

小金沢連嶺

斎藤隆子

長兵衛山荘を後にして、石丸峠へ向う。まだ日の昇らない朝、富士山が静かな姿を現わした。葉のすつかり落ちこしまつた木々を通りぬけて沢を渡るとやがて小屋平尾根の登りだ。ジグザグな登りはつらい。気のおけないヤ子と二人なので、つい気もゆるみがちになり、なんだかんだといつては休んぢしまう。やがて富士山の白い山肌が若々しいオレンジ色に染つて新しい一日が始まつた。お世はずゆつくり行こう。甲府盆地を隔てた南アルプスの白い峰々、ハケ岳が次々と朝日に映えて美しく変りゆく。尾根上に出ると、小金沢山が右手に黒々とみえる。眩しい日を受けて、熊沢山の平らな道を行けば、明るくひらけた石丸峠へとたどりつく。一休みして長峰、牛ノ

寝通りへの道を分けて狼平へと下る。気持の良い草原を
わたつて小金沢山の登りとなる。展望のきかない深閑と
した尾根を登つて頂上に立つ。やたらとゴミが多くて少
々がかりするが、今日は雲一つない上天気、湯之沢峠
まで富士山めがけて歩くのだと思うと楽しい。道は下り
になつて、草原、伐採された木々をぬつてゆく。肩まで
ある笹原を歌いながらゆるやかに登れば牛奥^ウ雁^ガ腹^ハ擢^ヒ山に
立つ。頂上はぐるりと展望に恵まれ、いよ／＼うれしい
私達二人は、カメラを出したり、おしゃべりに、食べる
ことに大分のんびりとしてしまつた。丹波の山々が暖く
紫煙に包まれてあの山間に静かな里の秋がある。とヤ
子がいう。甲府盆地はとみれば、薄い雲のベールに覆わ
れて、南アルプスを一層雄大な屏風に仕立てている。も
つと遊んでいたいのが先は長い。下ればこれまた居心地の
よさそうな草原で、風が絶えず吹き抜けてゆく。道は笹
と樹木の登りとなり川胡桃の頭へと着く。古いガイドブ

ツクでは指導標の文字がはつきりとしてゐるのに、風雨に打たれてか今は皆目わからない。道をなおも南へ進めば黒岳への登りだ。倒木をぬつてゆく歩みにくい道が続く。やつと黒岳へとたどりつく。大峠への道を分け、明るい斜面で腰をおろす。十一月も下旬だというのに吹き上げてくる風さえさわやかで、本当に暖かい。いよいよ大きい富士山の中腹がにぶく照り返つてゐる。あの大斜面に挑む人間のひどく小さいものに又頼もしくも思えたりする。富士の左手奥にかすんでいるのは愛鷹山だろうか。まわりの山波も名指すことができたなら生き生きとしてくるだろうに。

ここから湯沢峠へと下りとなる。土埃のひどい道をはけおりると白岩丸である。大きくガレた脇を一気に下れば湯沢峠である。右へ道をとると日の当たらない沢を降る。ところどころ厚くはった氷の上を滑らないようゆつくりとゆく。幾筋もの小さな流れを集めてゆく沢にそつ

て歩けば朽ちかけた木馬道へ出る。峠から五〇分ほどで
山道は、工事の進んでゐる林道に断たれてしまふ。飛び
下りて林道へ出れば、退屈な長い道を三時間も歩かねば
ならない。田野鉦衆を過ぎて部落の屋根が見えてくると
二人共歩くのがいやになり少し待つてバスに乗ることに
する。又の機会を約束して甲府へ帰る丫子と初鹿野駅で
別れた。

土寸 の

吉岡信子

足があつて辛わせ
山へ行かれて辛わせ

あなたにめぐりあえて辛わせ
あなたといふ時辛わせ

あなたと山を歩く時
もつと辛わせ

ちつちやなちつちやな一つのおもい

おおきくなつてパチンとわれた

そして

あなたはこたえてくれたそのくらびるで

育てようこの愛のかたまり

大きく大きく、小さく小さく

かたかくかたかく、やわらかくやわらかく

SHCSHC SHCS SHCS
HCSHC SHCSHC SHCSHC SHCSHC
新ハイとの出合い
CHSC

佐々木隆

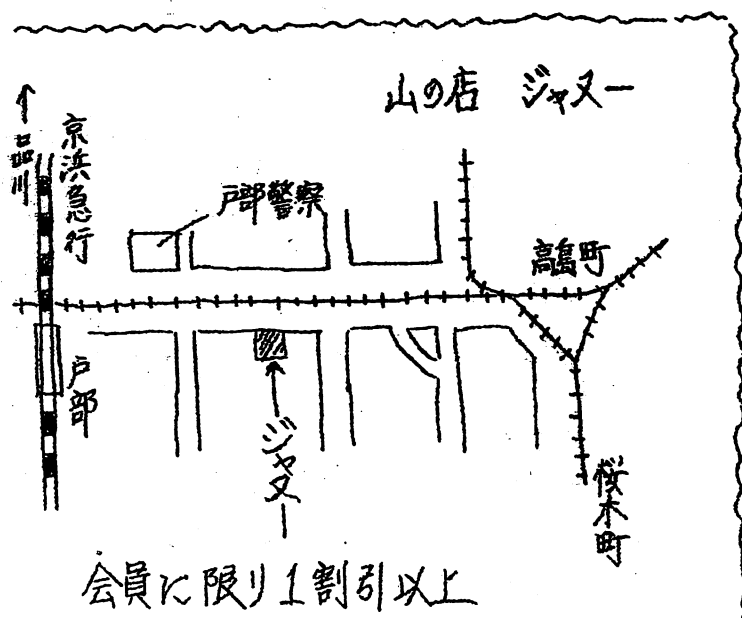
新ハイと私との出合いは、ちょうど一年前の昭和43年
1月14日であるへ新ハイ誌はその3ヶ月前。1月14・15日
の連休を利用しての本部山行、サーブスチエーンめぐり
「入笠山とマナスル山荘」に参加したのである。もちろん

ん会には知人一人いるわけでもないのど果してどんな会
びどんな人達が参加するのか新ハイ誌だけでは見当もつ
かず、ちよつぴり不安であり楽しみでもあった。

さてそんな私の心知るや知らずや三々五々集つたメン
バーはへ后で知つたのであるが、眞に老若男女、老は60
十の才と思われの方から若は今回の山行の係であるAさ
んのお子さんむも才になる男の子まで男女合わせて16名、
茨木、埼玉、東京、神奈川、静岡と各地から集つて来た
のである。これは私にとつて驚きであつた。そして新ハ
イの層の厚さ、広さをその一端ではあらうが身をもつて
感じ得たのである。

途中で暗くなり吹雪に吹かれて多少泣かされはしたが、
全員無事マナスル山荘の暖いお茶とストーブに迎えられ
た。夕食后一部屋に集つて自己紹介やら山の譚やらで榮
しい一時を過ごした。新ハイ20数年という大ベテランか
ら、これから新ハイに入ろうかなという大新米？まぶ色

々々山の詩も尽きなかつた。翌日は自由行動という事で、
 スキーを楽しむ春、頂上へ向う春、ユタツビ丸くなつて
 いる若等々出発までの時間を各自思い思いに過ごした。
 こうしてこの山行も無事終つた。
 私にとつてこの山行も無事終つた。
 行、つまり見ず知らずの人達と
 の山行は初めてなのだが、山か
 ら帰つても一週間、10日と、山の
 余韻が全身に残り、私の成人記
 念山行として素晴らしい思い出と
 する事ができたのである。又こ
 の山行がきっかけとなつて新ハ
 イの会員となり、当横浜支部に
 入会する結果となつたのである。





無題

中山一重

狭い島国に億と言う人間が生活している。
どこへ行つても人・人・人。何んて多いことよ、それに劣らぬ山の数の多いこと。一、二、三等米の順位ではない三角島の種類である。名山あり、誰れも来ずひつそりとしている山ありで、こんなに素晴らしい楽園はない。

春は残雪に輝くアルプスの峰々、小鳥の囀り、夏は雲海の散歩お花畑と三千米、秋になれば紅葉して心の淋しさを語り、冬はスキーと低山歩き、陽だまりでの一時、暇とお金があればな——。

都会に住んでいる我々は何にかとストレスが多く先ず交通戦争と人間関係と様々なことをしなければ生活して行けない可愛想な生き物だ(ヘリッ)御先祖様はオランウータンかチンパンジーかは知らぬが思い切り自然と親しみ

自給自足（へ当り前）の生活をして美味しい空気を腹一杯吸つて今思うと羨しい。今私が吸っている空気は汚れて汚れて常に鼻の中でつまりそして腹黒くよりも鼻黒いのむず。そして御先祖様の愛した自然にも見失われ、たまたまの山にも人、人、人の少ない静かな山に行けばタクシーの乗車拒否をされあわただしく山を登り降りなければなりません。失われて行く自然よ、たとえ満員列車であらうともその美に引きずられていつまでも求めてやみません。

山での失敗

浅井 俊明

山頂へ着いて、さあかんづめでも食べようと思つたらかん切りを忘れていたなんていう失敗は誰しもあるだろう。案外小物を忘れて山では困ることがあるものだ。大

さな山行ともなれば、携行品をメモして、出発のさい調べてみるから必要品を忘れることはないが、日帰り山行ともなると、出がけにあわててザツクへつつこむものだから忘れものがままある。忘れてもなんでもないこともあるが、時に苦勞させられることがある。

皆さんは、日帰り山行の時、懐中電灯を持っていきましか。これは、日帰り山行でも必携品であるが、夏のよう

うに日が長いときには持つていかぬ人もいる。三年ほど前の夏、丹沢へ沢登りに出かけた。どうせ明るいうちに降りれるからと思つて、懐中電灯をもたずに出かけた。カン／＼照りど、水無林道の登りに意外と時間がかかり、戸沢出合に着いたのは昼頃となつてしまつた。背戸の沢左俣を登つて緩線に出、政次郎尾根を下つて再び戸沢の出合に戻つてきたのが四時頃であつた。晴れていた空も途中から曇つてしまい雨模様となつた。作治小屋で休憩し、作治じいさんと暫くダベつて小屋を

出た時は、薄暗くなりかけていた。水無林道をチンタラ下つてゐる途中で真暗になつてしまひ、運悪く月はなく、おまけに懷中電灯もない。水無林道は道巾が広く、また何度も通つたことがあるので、踏みはずす心配はなかつたが、水たまりに入りこまぬよう懸命に眼を開いて歩いた。いつもより大分時間をくつて、ようやく大倉のあたりへ近づいたが、さて困つた。林道から水無川へ降りる降口がよくわからぬ。あたりをうろくして、やつとのすえでこの辺らしいと見当をつけて降りた。次に困つたのが水無川をどこで渡るか。明るければ、飛び石伝いにピヨン——と渡れるが、どの辺が浅く、又飛び石があるのやら全くわからぬ。ここに至つて、どうしようもななく、はだしになつて川を渡つた。

大倉へ着いたら最終バスは出たあとで、くらやみの中の徒歩に疲れてしまひ、タクシーを歸つた。大倉一帯の間をタクシーに乗つたのは、この時はじめてである。

山へ行く時には、体調を整えねばならない。私は、夏
は冷たいものを飲みすぎてよく腹をこわす。数年前の夏、
立山から槍ヶ岳までの縦走を試みた。夜汽車は大変な混
み様で暑くてどうしようもなく、冷たいものを少々飲み
すぎたらしい。弥陀ヶ原へ着いた時には、已に腹の調子
が少々おかしくなっており、同行者よりしばらく遅れた
が、どうやらこうやら才一日目は無事に目的地へ浄土山へ
到着。
41

才二日目、依然として調子悪く、前日より悪化。そ
れでも我慢してザラ峠を越して五色ヶ原までがんばった
が、ついにここでダウン。三十九度近くまで発熱し、全
く荷物を買えなくなり、同行者に負担をかける始末とな
ってしまった。その日は、スゴ乗越で天幕を張ることと
なったが、五色ヶ原の花園や越中沢岳のなだらかな山稜
などほとんど記憶に残っていない。
こんな始末で、結局縦走計画は失敗に終り、已に廃道

となつていたスゴ衆越より真川ダムへ下る道を通つて、
ほうくのでいで逃げることとなつた。
一行五名で出かけたが、私の他二人は現在も横浜支部
会員で、よくあの時はこうだったねと言われる。全く面
目ない次第である。

静かな二子山

石山 武



三浦半島では唯一の一等三角点の置かれてい
る二子山、この山も宅地造成のおかげでまちな
く崩されようとされているので、我々ハイカー
にとつては非常に残念である。

この附近には一〇〇米以上にしかないと言う植物が
多数しぐり、その数も二〇〇〇種に及び全国でも非常に
珍しいと云われ、その保存が叫ばれているので植物に詳
しい人はぜひ一度訪れて見ると良いだろう。

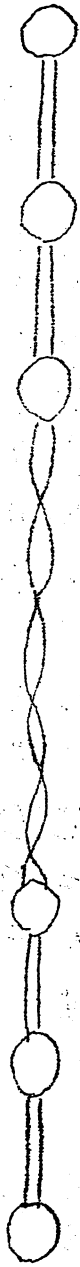
山頂は上二子下二子の双峰にわかれ、一等三角点は上
二子の頂の真中にさみしく立っている。下二子は雑木林

にかこまれて展望はきかないがとて静かな山頂だ。

上ニ子は昔の砲台跡で僅か二〇〇米の高さであるが広い草原と三六〇度のすばらしい展望で、北方には岩峰の鷹取山、青空に浮かぶ真白い富士、丹沢の山々、右真下に相模灘に小さく浮かぶ江の島、南方は三浦半島の山波が望まれ、さらに東方には東京湾に小さく浮かぶ船、房総半島鋸山の変わった姿が望まれる。

天気さえ良ければカヤトの静かな山頂で大展望と昼寝で大いに楽しむことができ、しばらくは時のたつのを忘れさせてくれる。

静かな山歩きの好きな人、また恋人と山に行きたい人、ぜひ一度訪れて見ると良いだろう。君と僕にしかわからない山の良さがわかるだろう。



ooooo

あこがれの山

ooooo

佐々木美智子

人それぞれに故郷があるように、山を愛する者なら誰しも、心の山をお持ちでしょう。私のそれが、槍ヶ岳であるように……。この山が、いつの頃から私の心の山になったのかは、定かではありません。が、こんな記憶があります。

それは、もう二年程前の事になりますが、私は会社の仲間と、西總高に行く機会にめぐまれたのです。その当時私には、7山へ行つてきました。と言えらるような山行は、ほんの二三回しかなくつたのです。身近にある丹沢すら、一度も歩いていない状態でした。その私が、リーダーの7心配しなくとも、連れて行つて上げるよ。と言ふ一言だけで、後先の事も考えず出かけたのは、有名な總高岳に誘われたのでもなければ、素晴らしいと言われて

いる上高地の紅葉を見たかったからでもないのです。すなわち、槍が岳見たさの一心からだったと。

しかしながら、初めて槍が岳を見られるはずだったこの山行も、山経験のなかった私の足では、やはり西穂高岳頂上に立つ事できず、こうして槍が岳との初の出合はかなわなかつたのです。けれどもこの山行は、私に素晴らしいプレゼントをくれたのでした。自然の美しさ、偉大さ、山を登る楽しさ、素晴らしさを、知る。という無形の贈り物を。そして、いつの日にか槍が岳に登つて見ようという一つ一つの山に対する目標をも、与えてくれました。この山行以後です。槍が岳の姿を求めて、私の山へ出かける回数が増え行つたのは。

槍が岳との初の出合、それは、次の年の夏、白馬岳登頂の時でした。しかし、北アルプス北端のこの山から見た槍が岳は、鉛筆の先程の小さな突起でしかなかったのです。そこで、私はさらに山行を重ねて行きました。槍が岳の勇姿を求めつつ……

そして、西穂高の山行より数えて丁度二年目、私はその山の勇姿に、間違ひなく接する機会を得たのです。昭和四十三年十月初旬の事でした。その山行は、私の期待を一つも裏切らぬ、素晴らしい山行だったのです。

友への手紙

再び上高地に来る事が出来たうれしさに、足も地につかぬ思いで車を降り立てば、さすがに十月も十日を過ぎたこの上高地に吹く風が、一瞬身体を丸めさせる。山を歩くようになって二年。二度目の上高地入りだというのに、旧友に会ったように、あの山肌や清らかな流れの梓川が、そしてそここの木々一本一本が懐かしいのは、どうしたわけでしょう。

今日は、徳沢泊り。この上高地をゆつくり歩く事ができます。懐かしの河童橋。二年前の西穂高山行の際は、うれしくて、この橋の上を何回行き来した事か。あの頃と少しも変らぬその欄干に私は手を触れ、しばし当時の

感慨にふけつたのです。そして明日は間違ひなく見られるであろう槍ヶ岳の勇姿をも、思い浮かべたのです。しかし、上高地とは何と人の多い所でしょう。時間は早い。そんな所に長居は無用と早々に徳沢への道を進めます。和服姿の老夫婦や、ハイヒールを履いた女性、のらりくらりと歩く私達を、どん／＼追抜いて行くのにうんざりしながらも、明神を過ぎれば人も少なく、やつと私達の意とする山行になつてきたようです。

徳沢。いつか本で見た、むせかえるような岩葉の頃の徳沢が印象的で、忘れられませんでした。が、岩葉と紅葉の違いはあれど、格好の憩の場に変わりはないようです。私達もこの気持ちの良い広場の一角で、明日の天気を祈りつつ、昼寝をしたのです。

十月十一日、九時三十分。一日遅れて出発してきた、この山行のリーダーと、徳沢園前で落合い、いよいよ長

塀尾根より蝶ヶ岳への登りにかかります。が、高度を増すにつれ、私のはやる心に反して、足が思うように動いてくれません。夏山以来、ニケ月山行を御無沙汰しているせいばかりではないようですが――

どの位歩いたでしょう。うつそうとした樹林の急登がその傾斜をゆるめた頃、小さな一つのピークに、突然飛び出したのです。長塀山山頂でした。そこで私が目にしたものは、紛れもなく夢にまど見た槍ヶ岳の勇姿だったのです。この瞬間の感激を何と言葉で表現したら良いのでしょう。素晴しい」と言う言葉一つで片付けては、あまりにも表現不足の気がします。この場に貴方を立たせて、槍穂のその絶景を見てもらい、適当な言葉を搜して下さいと言ったなら、それは、私の逃げになるでしょう。二の句も出ずに、いつまでも飽きずにその絶景を見つめていた私は、蝶ヶ岳へ行つたらもつと素晴しいよ。と言う言葉に従われて、蝶ヶ岳への道を取ったのです。そ

してその言葉に偽りのない事を知りました。
蝶の小屋に、荷物を置くのもちどかしく、早々に外に
飛び出せば、今まで長嶺山にかくされていた、梓^の川筋か
ら穂高^への稜線が一望に見渡せ、我国山岳中最高
と言われている大観が、目の前一杯に広がっているの
です。それは大自然が作り出した素晴らしい造形でした。切
戸を中にして、左には穂高連峰、右には南岳、中岳、大
喰岳を経て、その大観に終止符を打つかのように、あの
特徴のある尖った峰を見せている槍ヶ岳。まさに圧巻で
す。何時間見てもあきないこの大パノラマを、私達は、
這松のくぼみにありこんで、夕暮せまる頃まで見つめ
たのです。明日は、あこがれの山、槍ヶ岳の勇姿を終始
見ながら、燕まぐり入ります。今日の感激以上に、私を満
足させてくれる事でしょう。ただひたすら、天気である
事を祈ります。

今日の行程は長い、ゆつくりする余裕もなく、想像以

上にこんだ昨夜の宿、蝶が岳ヒユツテを後にしました。
日の出前である。日の出と共に、刻一刻と変わる山肌の
何とも云えぬ美しさに、心奪われながら、行程を進めま
す。常念岳。苦しかった印象で一杯です。頂上まで、ご
ろ／＼した石ころ道の続くこの山は、登れど／＼茶褐
色一色のその頂上は近くなりません。その苦しい登りが、
一時間半も続いたでしょう。やつと到着した頂上から
の展望は、本当に素晴らしいかつたですね。この景観を、あ
こがれ求めて無理してまで来たのです。苦労して登つて
来たかいがあつたと思ひました。

しばしの休息の後の尾根歩きは、期待通りのものでし
た。歩くたびに、一つのピークを越えるたびに変わる山
容に、ただただ言葉もなく黙々と歩きました。そして疲
れを感じ始めた頃、はるか彼方ではありました。白い
美しい山肌の燕岳を、そして今日の憩の宿、燕山荘の赤
い屋根を見出しただけです。

いよく、四日間の楽しかった山旅とも、今日でお別れです。終始天候にめぐまれたこの山行は、今日もがスる事なく、北アルプスの素晴らしい山容を見せてくれました。が、さすがに高山は、初冬の感あり、下山の仕度をして、おもてに出ると、雪がちらつき出したのです。あと数日もすれば、その山肌は一面に白い美しいベールをつける事でしょう。見飽きた感のある檐が岳も、今日が見おさめと思うと、やはり後髪のひかれる思いがします。その勇姿をもう一度じっくりみつめて、胸にきざみこんだのです。そして、この場を去りたい心境にかられながら、素晴らしかったこの山旅が、私の短い山行歴に、記念すべき一頁を加える事の、まちがいないのを心にかみしめながら、下山路を急ぎました。

平ヶ岳にて

今川真沙子

空は青

白雲一つ二つ

風はさわやか

はるかなる草の原

お花畠の床の中

独り寝ころび何をか想わん

山は緑

ちとう波立ち

水は清らか

松の林の庭の中

友とたえず何をか語らん

夕は暮色

白き雪溪のもと
煙は高く空に向かい
打ち上げる花火は
幾万の星となりぬ

満ちたりた日々

久保田治

二十才を過ぎてから山登りの良さを憶えた私にとって
いつも念頭にあつた山がある。南アルプスの赤石岳だ。
というのは私の母が大井川の上流の出であり、何代にも
わたつて私の祖先が南アルプスの自然に支えられて生活
し、私の血もその流れを汲んでゐるから母なる山として
赤石岳は他の山にない強く魅かれるものを感じる。そし
て横浜で戦災に会い静岡県の袋井市で育つた私にとつて、
小学校の裏山から遙か彼方に雪をまとつた連峰が見られ
た。それは真白く輝いて冬の間しか見られる事がなかつ

だが、寒い朝など到底私達が登る事の出来ない神々の座
として眺めたものである。そしてそれが赤石連峰である
と教えられた。それから何年かして山歩きの楽しさを知
った私にとつて毎夏赤石岳は真近なところにあるのであ
るが未だ登れないで今になつてしまつた。何年か前私は
ある山友達との会話で「僕の山歩きの最終は赤石だ。赤
石に行けたらいつ山をやめても思い残す事はない」と言
つた事を憶えている。實際赤石を越えたら山をやめるか
どうかわからないが、そんな訳で赤石岳はあこがれの山
として遠くから眺めとつておきたい。或いは一生登れな
いかも知れないが――

實際登山とは金と暇と体力と三拍子揃つていなければ
まゝならない。その一つでも欠けたら締らめねばならな
い。趣味として最高だと思ふがへ最も大きな感動を与え
てくれるもの――それは大自然であるから――長く続け
られる人は極く少い。一生の間で数年間という人が圧倒
的である。私もぼつ／＼山への欠別の時がくるかと思ふ

とへそれは自分自身の意思であるが）なにか寂しい。思
えば山を思う時が一番楽しい時であつたし、最も満ち足
りた日々であつた。特にこの数年間支部の良き仲間と山
行とを共に出来た事は山の良さと共に忘れる事が出来な
い。特に平々安安の思い出はもう二度と同じメンバーで
訪れる事がないと思つてというYさんのスライド説明、
下山の件は一抹の哀愁を感じさせて何度聞いてもジーン
とくるものがある。へもつともこの気持、行つた人にな
ければわからないだろうが）

交通費や写真代などの数年間私の小使いは大半山で消
費してしまつた。その費用を計算した事はないがそつと
りそのまま貯金していたしたら結構な金額になつてい
たに違いない。しかし何を買つたにしても山で使つたお
金が一番値打ちのあつた使い道であつたと思う。何故な
らば耐久消費財として山の思い出程長持ちするものはな
いから。何を買つたにしても十年、二十年と長持ちする

ものはないから。そこへいくと山行の思い出は一生心の糧として持ち得ていくものである。そういう点で大変安い買い物をして満足感一杯だ。私はこの貴重な買い物をしていくことにしよう。



スキー

渡辺三世子

スキーというスポーツは実に楽しいものである。私のように滑れない者にとっても楽しいのであるから世のスキーヤーの気持ちには計り知れない。そこで少しでも世のスキーヤーに近づくようにと、年も改まった正月早々本部主催の「スキーセミナー」に参加したのであった。知らない人ばかりでさぞかし心細いことではよう。と心配してくださることはない。兄弟は他人のはじまりというけれど他人は始めから他人だから却ってつきあい易い。栗子

国際スキー場」といつても知らない人が多い。実は私も知らなかったのだが、知らない所へ行くと知らない所が一つ少なくなるから進んで知らない所へ行くことにしている。

このスキー場は昨年できたニューフェイスであるが結構変化のあるゲレンデで私のような初級者はもちろん中級者、上級者でも楽しめる。リフト3本、ロープウェイ2本がかつている。鉢森山(二〇〇三M)頂上の展望はすばらしく雪を被った山々が雪雲の切れ間から姿を見せる。冬空の下にくつきりと現われた山容は何とも表現しがたいほど美しい。だから私はスキーに行くと、帰りはリフトで降りてもよいから頂上まで景色を見にいくことにしている。もちろん粉雪を跳つてさっそうと滑り降りてきたいのだが。

さて、そのスキーセミナーは腕前によつて組合けされ各組に先生が一人つく。またその先生が懇切丁寧に教える。

てくれる。直滑降しかできなかった人はボーゲンが
できるようになり、ボーゲンができるようになり、ボーゲン
ができたら人はクリスチヤニアのまね事ができるようにな
ること請合い。将来一級でもとつてやろうという人は
来年ぜひ参加しなさい。五年かかるところが四年半に縮
まること間違いなし。スキーは整備されたゲレンデで滑
つてばかりではおもしろ味がない、新雪の中で滑つて
こそ本当の味がわかるのだ。という人がいるけれど、新
雪というのはころんだら最後なかく起きあがれないの
で初級者にとつてまことにやつかいなものである。暖冬
とやらで暮に雪が降らなかつたせいから年があけたとたん
猛烈な勢いで昼夜がまわらず降り続けるのでたまらない。
雪だるまになることは言うまでもない。

スキーに行つても山に行つても、どこへ行つても氣に
なるのは食へること。このスキー場で一番おいしくて安
いのはラーメン百円也。これはぜひくお勧めする。お

つゆは少々うす味だが、おそばが細くておいしい。なにしろチャーシューが二枚も入っているのには感激する。カレーライスが百五十円であるが、これは絶対食べないほうがよい。カレーライスなんてハイカラな名前をつけないで、うどん粉ライスとして売り出したほうがよっぽど気がきいている。

ラーメンといい、講習といいとても良かったが、ただ一つ残念なことがある。それは、私が捻挫したことである。



湯口静枝

私が初めて行った山は「守屋山」。
この時はどこにあつてどんな山だか全然知らずただ
達のあとをついて歩いただけだった。途中で雨にふられ、
道をまちがえ、ずい分歩かされた。これといつて記憶に

残る所もないようだった。その後は行つてないのでぜひ行つてみたいと思つています。初めての山があまり良かった訳でもないのにそれから山に行く事が多くなり、もつと山を知る為には多くの人達と語り山行をしたいと思いつ新ハイムに入会しました。

きつい山道をおえながらのぼり、山頂に立つた時の気分、何とも云えない満足感があります。又いつまでながめていてもあきない山々。一目みてどこの山かわかる様に山の顔があります。やさしい顔、こわい顔、いろいろな顔があります。見ているだけではなく、私の足でこの山の顔をみてみたいと思つています。

山行 一〇〇回

竹田 明

昭和33年11月3日、大菩薩峠へ行つたのが山のよさを知る始まりだった。その時の思い出は今でもはつきりと

寛えている。青く広がる空、彼方に富士の雄姿、そしてなによりも深く印象に残っているのは枯木に花を咲かせた美しい霧氷である。山なんかどこがいいのだろうか。と言つていたのだが誘われるままに付いていつたこの山行が今では年に20回位も行く様になるとは思いもしなかった。

44年1月3日、初山行より10年2ヶ月、100回目の山行を迎えるべく伊豆天城山に出かけた。久しぶりの単独行に多少物たりなさを感じながら伊東に着く。(途中小田原付近にて元日に山で見られなかった御来光が水平線上に昇り海からの日の出も山とは違ったよさを味わった。始発バスに乘る予定が休日以外は運休の為タクシーをあたらと丁度天城高原ロツジに回送の車があり、バスより10円高い200円で交渉成立。新ハイムに入るまではタクシーを利用する事はほとんどなかったが最近ではタクシーの方が多い位である。

遠笠山頂、展望台からの景色は素晴らしい。正面に雪を抱いた富士、右に丹沢、箱根の山々、太平洋上には三原山の噴煙もはつきりと望める。左に目を移せば昨年春に行った愛鷹山が長く横たわっている。自分以外誰かいない静かな山頂にいと以前の山行が頭に浮んでくる、たしか富士山に登ったのは、大菩薩のあくる年の夏だったと思う、当時河口湖からのバスは今の様に直接五合目まで行かず急傾斜になつてくる三合目からはジープ等の様な前後輪駆動の力のある車に乗りかえたのである。その日は悪天候で八合目までしか登れず苦しかった事だけしか覚えていないがその後二回頂上に立った。

丹沢にもよく出かけた。しかしなんといつても白馬岳での経験は今後とも忘れることは出来ない。ある年の七月初め、友人Mと二人で大糸線信濃四谷に着いた、あいにくと無情なツエ時の雨が降り続いており前途多難を思わせた。猿倉へのバスは土砂崩れで10分位の所までしか

入らず後は歩き出すが天幕を持つた装備は早くも重く肩に
にくいこんでくる。三時間程で猿倉に着いた。この頃には
雨も上がり先を急ぐ。この年は雪で多いとのこと。白
馬尻小屋の下より大雪溪が始まる。雪溪上は大小さまざま
まの石が落石によつて散らばり、中には直径三メートル位
もありそう大な大石もころがっている。一步／＼踏みしめ
て登るが猿倉迄の予定外の行動で歩は進まず小雪溪に取
り付く頃には早くも夕やみがおとずれてくる、この頃よ
り二人とも疲れが目立ち付近で幕営しようとしたが風が
強くおまけに大雪溪の途中で落石によりケガをした人を見
ているので決断が出来ないまま20時やつとのことで宿
泊地に着くが一段と強まった風の中では幕営になれない
二人には骨がおれる。又砂地ときているのでペグがきか
ない、小屋の人にも出てきて危険だからやめろと云う、あ
きらめて小屋に入るが苦しい思いをしてここまで来たの
にと思うと残念でならない。

翌朝、又雨が降っている、風もあい変わらず強い。10時

頃まで様子をみたが日程の余裕がないので予定のコース
白馬大池へ向った。これが危険な目に合う原因だった。
白馬頂上を過ぎた頃から風雨は激しさを増してくる。「厳
しいな、引き返そうか。」なあに、大池まで二時間もあれ
ば着けるんだ。視界数メートルの中を慎重に下つて行く、
たびたび吹きつける突風にギスリングを背負った体はあ
おられ飛ばされそうになり岩や木にしがみつく。雨は降
ると云う様ななまやさしいものではなく噴き上げてくる。
雨具の方は岩角にひつかかったりして所々切れこしまい
こおる様な冷たい雨水はようしやなく体の中まで入って
くる。手もかじかんで思うように動かない、それでもど
うにか三国境と思う所に着いた。ここは新潟、富山、長野
県の境で大池方面と雪倉岳方面への分岐点になっている、
と云つてももう二メートルはなれば友の姿も薄れる程の
風雨と霧の中指導標のある所も分らず四苦八苦、時間は
普通三〇分でこれる所をすでに二時間以上経過している。

遠笠山頂、展望台からの景色は素晴らしい。正面に雪を抱いた富士、右に丹沢、箱根の山々、太平洋上には三原山の噴煙もはつきりと望める。左に目を移せば昨年春に行った愛鷹山が長く横たわっている。自分以外誰もない静かな山頂にいと以前の山行が頭に浮んでくる、たしか富士山に登ったのは、大菩薩のあくる年の夏だったと思う、当時河口湖からのバスは今の様に直接五合目まで行かず急傾斜になつてくる三合目からはジープ等の様な前後輪駆動の力のある車に乗りかえたのである。その日は悪天候で八合目までしか登れず苦しかった事だけしか覚えていないがその後二回頂上に立った。

丹沢にもよく出かけた。しかしなんといつても白馬岳での経験は今後とも忘れることは出来ない。ある年の七月初め、友人Mと二人で大糸線信濃四谷に着いた、あいにくと無情なツエ時の雨が降り続いており前途多難を思わせた。猿倉へのバスは土砂崩れで10分位の所までしか

入らず後は歩き出すが天幕を持つた装備は早くも重く肩にくいこんでくる。三時間程で猿倉に着いた。この頃には雨も上がり先を急ぐ。この年は雪で多いとのこと。白馬尻小屋の下より大雪溪が始まる。雪溪上は大小さまざまの石が落石によつて散らばり、中には直径三メートル位もありそう大な石もころがっている。一步／＼踏みしめて登るが猿倉迄の予定外の行動で歩は進まず小雪溪に取り付く頃には早くも夕やみがおとずれてくる、この頃より二人とも疲れが目立ち付近で幕営しようとしたが風が強くおまけに大雪溪の途中で落石によりケガをした人を見ているので決断が出来ないまま20時やつのことで宿泊地に着くが一段と強まった風の中では幕営になれない。二人には骨がおれる。又砂地ときているのでペグがきかない、小屋の人ちも出てきて危険だからやめろと云う、あきらめて小屋に入るが苦しい思いをしてここまで来たのにと思つと残念でならない。

翌朝、又雨が降つてゐる、風もあい変らず強い。10時

頃まで様子をみたが日程の余裕がないので予定のコース
白馬大池へ向った。これが危険な目に合う原因だった。
白馬頂上を過ぎた頃から風雨は激しさを増してくる。「厳
しいな、引き返そうか。」なあに、大池まで二時間もあれ
ば着けるんだ。視界数メートルの中を慎重に下つて行く、
たびたび吹きつける突風にギスリングを背負った体はあ
おられ飛ばされそうになり岩や木にしがみつく。雨は降
ると云う様ななまやさしいものではなく噴き上げてくる。
雨具の方は岩角にひつかかったりして所々切れこしまい
こおる様な冷たい雨水はようしやなく体の中まで入って
くる。手もかじかんで思うように動かない、それでもど
うにか三国境と思う所に着いた。ここは新潟、富山、長野
県の境で大池方面と雪倉岳方面への分岐点になっている、
と云つてももう二メートルはなれば友の姿も薄れる程の
風雨と霧の中指導標のある所も分らず四苦八苦、時間は
普通三〇分でこれる所をすでに二時間以上経過している。

どうか道はわかつたが体は完全に冷え切り心もあせつてくる。だが行動時間が短いせいかわれはあまり感じない。(後で思うに遭難するのではないかと緊張していたためかも知れない。)とにかく小屋まで早く行こうとハイマツの海の中を急ぐ。小蓮華岳を過ぎる辺りで雨は小降りとなり視界も多少よくなつてくる。広くゆるやかな尾根を下り続けると突然目の前に白馬大池と小屋が現われた。小屋にはあか／＼とストーブが焚かれていた。白馬岳頂上より五時間かかつてやつとたどり着いたのである。この様に白馬岳での二人は山に対する無知と無謀な行動は危険であることを思い知らされた。

天城遠笠山頂は一月なのに暖かく横になつていると眠くなつてくる。かなり時間も過ぎた万二郎、万三郎岳に向うことにしよう。ゴルフ場を横切り、一度車道に出ると10分ほどで縦走路の樹林帯に入る。傾斜は徐々にきつくなるが苦にならず快調に歩を運ぶ。万二郎岳はやせた

ピーク、ここから一月の支那山行で行く事になつてゐる
箒木山への道が分れる。石三郎へは一たん下つてアセビ
の林の中を過ぎるとやゝ急な登りがあるが案外簡単に標
高で四六〇メートルの頂上に出る。一等三角点の上に組まれ
たヤグラに昇ると遠笠山以上の大展望が楽しめる。ここ
まで十人ほどすれちがつたが男の人は二人だけ、天城は
女のみに人氣があるのだろうか。石三郎より八丁池までは
ほとんど登り下りのない單調な道が続く。これでは物
足りないとはかり駆けださんばかりの早さで歩いてみた
らコースタイムの半分もたない内に八丁池に着いてしま
まつた。池は全面結氷して地元の子供達がスケートに興
じていた。今日はここに泊り明日は長九郎山方面に足を
延す予定だったが道が荒れていて無理とのことなので帰
途につく。

一〇〇回目の山行も静かに終つた。行きたい山はまだま
だいくらでもある。今後白馬岳を含めた多くの経験をい

かしていきたい。現在一つの目標として深田久弥氏推す
る日本百名山を中心に歩き続けたいと思う。

山の友

吉岡信子

日 今十時少し前です。ほつと一息ついたら19号を開いて
貴女の「足跡」を読んできました。「タカネヤハズハハコ」
思わず笑つてしまいました。私も○○で名前も憶えて来
ぞとばかり家へ帰つて、さてどんな花だつけとしきりと
首をかしげたもののひずから。本を開いてア、この花だつ
たつけなんて一人ひずさんざん笑つたもののひずから。こん
なハがキおかしいかしら。

机の上に置かれていた一枚のはがき
うれしかったナ

そつと頬に当てたら
山のおいがしたよ

趣味の行く末

今川真沙子

私が山登りに興味を持つようになったのは、つい二、三年前迄はスキーの為に生きていたような姉の影響による。二、三年前迄というのは、現在は、スキーより大事なダシナ様と坊やがいる為か、スキーの「ス」の字も口に出さない。お蔭で、それまではチヤホヤされて大事にされていたスキー、その他の用品も押入れの片隅で日の目へいや雪の目も見られぬ有様である。私が跡をついでスキーを始めれば道具も泣かずに済むのであるうが、生来のおつくうがり屋である為、どうも重たいスキーをかついであの混んだ列車にゆられた末、ゲレンデに穴をあける事を思うと行く前からぐったりと疲れてしまい始める気

を失うのである。

ところで私の身近に姉という好例があるが、女性が家庭に入つた場合、独身時代に何よりも打ち込んでいた唯一の趣味をこうも簡単に忘れてしまえるものだろうか。彼女に云わせれば、決して忘れてゐるのではない、チヤンスがあればいつでも行きたいが、現実問題としては無理という事なのだ。考え様によつては、姉の場合、坊やが大きくなり親子で再びスキーをはく時は来るだろうが！。なるべく早くそういう日が来るように！。しかしいづれにせよ女性には家庭に縛られ独身時代の趣味を一時或いは一生断念しなければならぬのだらうか。ケースバイケースでまあうが、私も自分自身にとつてプラスになると信じてゐる趣味を二、三へもちろん山登りも入れて持つてゐるが、これを一生続けられるかというとはたとえ考えこんでしまふ。自分の意志を強固に持つてゐれば出来ると言ふ人もある。周囲の事情によつて違つ

てくると言う人もある。その趣味を生かさなくて毎日々
幸也に暮らせられれば良いと言う人もある。しかし過去
から現在に至り何年か続けこきて少しオーバーに云えば、
自分自身の生きる糧になつてゐるものをそう簡単に捨て
てしまつて良いものだろうか。

前回の「しだ」にあとどの位山登りを続けるかという
アンケートがあり、私は「すべてこの事情が許す限りいつ
迄も」と答えたが、それも撤回しなければならぬのだ
ろうか。

世の中は自分一人のものではないので、そ う我まゝ
ばかりも言つていられないが、近頃しばしば私を考へこ
ませてゐる問題について記して見た。(S. 43, 12, 22)

会報受贈御礼

いつも皆様方の力作をお送り下さりありがとうございます。

ます。お送りいただくた
に、当支部も更に前進しな
ければと思います。

今後私達が楽しい山旅
を続けて行くために、皆様
方のよきご指導をお願い致
します。

- ◇大田支部
- ◇相模原支部
- ◇井の頭支部
- ◇千代田支部
- ◇奥武蔵支部
- ◇川崎支部
- ◇埼玉支部
- ◇葛飾支部
- ◇多摩グループ

(順不同)

通信
通信
会報
支部報
はんのう
支部報
さいたま(連絡版)
灯
通信

編集後記

一月に入つてから、原稿が続々と集まつたため、がり切りを二月に急いでやつたので、不充分な点があります。我慢して下さい。次号も更に多くの原稿を提出するよう努力いたしますよう。

三月九日、支部会員数名の御協力を得て印刷・製本を完了

しだ 才20号

発行 昭和44年3月12日

新ハイキングクラブ横浜支部

横浜市中區初音町の19（影山方）

編集者 浅井俊明

